

「言葉つむぎ屋」

—初稿—

2025/3/13

雨森 れに

〈人物表〉

高崎 紬つむぎ

(30) 代筆屋

吉沢 なな

(27) 高校教諭

橘 良喜りょうき

(18) 吉沢に告白した男子生徒

1.

代筆屋・書斎（夜）

応接間を兼ねた広い書斎。デスクの前に来客用のテーブルと椅子がある。大きい棚があり、筆記用具やレターセットが収納されている。

棚に便せんをしまう高崎紬（30）。

電話が鳴る。

受話器を耳に当て、首を傾げる。

紬

「もしもし？」

紬、微笑んで、

紬

「はい。代筆屋でございます。どのような代筆をいたしますようか」

2.

代筆屋・外觀（昼）

古い造りの一軒家。

開かれた門扉の先には小さい庭があり、春の花々が咲いている。

玄関に「代筆屋」という小さな看板がかかっている。

吉沢ながインターホンを押す。

3.

代筆屋・書斎（昼）

吉沢

「すごい。全部代筆用のですか？」

来客用の椅子に座る吉沢なが（27）。

筆記用具やレターセットの量に圧倒されている。

紬が紅茶を提供する。

紬

「時々、使う前に寿命がきちやうものもあるんですよ」

吉沢

「それは勿体ないですね……」

紬

「私は、気持ちも伝えないと勿体ないと思っています。だから、頼っていただいて嬉しいです」

吉沢、悲しそうな顔で、

吉沢

「でも、おかしいでしょ？ 教師なのに」

紅茶に視線を落とす。

吉沢

「（小声で）生徒を好きになるなんて」

紬

「立場上、慎重になりますよね」

吉沢

「そうなんです。しかもありきたりなんです、告白され

てから気になってしまってた」

紬 「それで、返事が卒業式の日なんです」

吉沢 「はい。直接話すとテンパってしまいそうなんです。だから手紙で断ろうかなと」

紬 「お断りの手紙なんですか？」

吉沢 「当たり前です……あの子には未来がありますから。だから誤解させないようにしたいんです」

紬 「吉沢さんは、とても優しいかたですね」

吉沢 「いえ。建前がなかったら、よくない方向に進んでしまいそうで」

吉沢が紅茶を飲む。

手が微かに震えている。

紬がノートを開く。

紬 「後悔のない手紙にしましょう」

× × ×

テーブルには空になったティーカップ、お菓子のゴミがある。

紬 「吉沢様から見て、橘様にはどんな魅力がありますか？」

吉沢 「えっ。そういうことも書くんですか？」

紬 「そうですね……一般的なラブレターの返事でやってしまうと、期待を持たせてしまうのでよくないんですが」

吉沢 「（焦って）じゃあナシナシ！」

紬 「教師として距離を置くなら、あなたの頑張っているところを認めている……という大人の目線にできます」

吉沢 「親目線みたいなの？」

紬 「はい。たとえば『優しくて、何にでも一生懸命なところが素敵だ』だと期待させますよね？」

吉沢 「そう思います。褒めるとダメな気がしちゃう」

紬 「じゃあ、『これから先、あなたの優しさや一生懸命なところに惹かれる人が出てくるでしょう』だど？」

吉沢がハッとした顔をする。

吉沢 「未来を応援するような言葉を入れたらいいんですね」

紬 「これなら、バレない程度に気持ちを入れられますよ」

吉沢 「それは……嬉しいですね」

吉沢の目に涙が浮かぶ。

紬 「私は吉沢様の代筆屋ですから」

4. 代筆屋・外觀（夕）

帰っていく吉沢。

5. 代筆屋・書斎（夕）

紬がデスクで作業している。

手元には手紙の下書きと吉沢からの情報が書かれたノートがあり、それぞれを見比べている。

考えるような仕草をしたあと、立ち上がる。

トレイを持って、棚へ向かう。

棚を物色し、水色のレターセットをトレイに乗せる。

次に黒ボールペン、万年筆、ガラスペンを取り出す。

紬がデスクに戻る。

試し書き用の紙を出す。

まずは黒ボールペンで波線を書く。

紬が首を傾げる。

つぎに万年筆で波線を書く。

やはりしっくりこないというような様子。

最後にガラスペンに紺色のインクを吸わせ、書く。

紬、納得いったように頷く。

深く深呼吸し、レターセットに手を伸ばす。

6. 代筆屋・書斎（昼）

吉沢 「これ、すごくいい色ですね」

吉沢が封筒を眺めている。

紬 「気に入っていただけて何よりです。まだ封をしていない

ので、中身もご確認ください」

吉沢、意を決するように姿勢を正す。

便せんを手にし、無言で読み進める。

紬は、緊張した面持ちで見守る。

吉沢が読み終わり、椅子にもたれかかる。

吉沢 「（泣きそうな声で）スッキリ、しました」

紬 「書き足しや削ることもできますけど……」

吉沢 「ううん。このままで。これで、教師に戻る気がします」

吉沢 は便せんを封筒に戻す。

吉沢 「私のどうしようもない恋心も、これで終われそうです。

教師の私は、こう言うべきだって、ようやく納得できました（封筒を差し出す）」

紬 「お力になれて、よかったです」

紬 が封筒に糊付けする。

吉沢 「言葉にするって、すごいですね。苦しくても、受け入れられる」

紬 「それは吉沢様が、ご自分と向き合って読んだからですよ。すごいのは吉沢様です」

吉沢 、驚いた表情をし、そのまま顔を伏せる。

吉沢 「ありがとう……」

7. 学校・外観（昼）

校門に「第52回 卒業式」の看板が立っている。

吉沢 M 「橘くんへ。卒業おめでとうございます」

吉沢 が帰宅する生徒たちに手を振る。

吉沢 M 「先日は勇気を出して気持ちを伝えてくれて、ありがとう」

8. 学校・廊下（昼）

吉沢 が廊下を歩いている。

吉沢 M 「私のことをそんなふうに思ってくれていたこと、本当に嬉しく思います」

9. 学校・教室（昼）

空き教室。吉沢 が空を眺めている。

吉沢 M 「ただ、ごめんなさい。橘くんの気持ちを大切にしたいからこそ、正直にお伝えします。私は先生という立場であり、生徒と特別な関係になることはできません」

ドアが開く。

やさしく微笑む吉沢。

吉沢 M 「これから先、あなたの優しさや一生懸命なところに惹か

れる人が出てくるでしょう」

吉沢の手が封筒を差し出す。

吉沢M「今は、夢に向かって努力し、自分自身を成長させることがとても大事な時期だと思います。その頑張りが、未来の橘くんをもっと素敵な人にしてくれるはずです」

吉沢の満面の笑み。

吉沢M「私は先生として、これからも橘くんをずっと応援します」

10. 代筆屋・書斎(昼)

絢が空を眺めている。

電話が鳴る。

絢、受話器を耳に当て、微笑む。

絢「はい。代筆屋でございます。どのような代筆をいたしますようか」

おわり